
SILWINGー白銀の翼ー

カミノユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I L W I N G ―白銀の翼―

【Nコード】

N 2 5 0 9 C

【作者名】

カミノユ

【あらすじ】

人間が持っているはずのない「翼」を持つ少年が、「翼なんていらなかった。」と告げる。少年は、あくまで普通でありたかった。しかも少年が持っているのは、片翼だけ。空を自由に飛びまわることにできない。しかし片翼だけでも、珍しいものは、やはり珍しい。次第に、少年の翼を狙うやからが出てきた。

プロローグ

「お母さん。何で、僕には、こんなにおおきな羽があるの。」
小さなころ、少年はこう母親問うたことがある。母親は、優しい声で答えた。

「それはね、おまえが神様に最も愛された子供だからだよ。」

「神様って、なあに。」

「この世界を創って、見守っているお方のことよ。」

「ふうん。」

幼い子供は、言っている意味がよくわからなかったが、うなずいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・夢か。」

しょうねんが眠りからさめ、ベッドから起き上がった。

15歳くらいだろうか。その少年の髪の色が銀色だったので、歳は分かりにくかった。

少年が手を顔に当て、ふう、と息をつく。

瞬間、

白い、そう、とても白い翼が、少年の着ている黒いシャツを突き破って、

——光をまとい、生えてきた。

2..ああ、何故私は飛べないのですか

「またか・・・。」

銀髪の少年の背中に、大きな白い翼がある。だがそれは、天使のそれのように自由には見えない。なぜならその翼は「片翼」だけだったからだ。

ばさりと、と左の肩甲骨部分にある翼を1回だけ羽ばたいてみせる。2回、3回と羽ばたき、少年は深いため息をついた。

「無駄だって、分かっているのになあ・・・。」

ごろり、とベッドに寝転がる。羽が邪魔だ。

「イテ・・・。」

翼は背中にあるので、横になったとたん全体重が翼にかかった。結構痛かった・・・。

「戻れ。」

少年がそういったとたん、白い翼は光の塵となって消えた。先ほどシャツを着たまま翼を出したので、その黒いシャツの背中には大きな穴が開いていた。

「あーあ、また無駄になっちゃった。」

無残なことに、このシャツはもう使い物にならないだろう。シャツに開いた穴は、あまりにも大きすぎた。

——日本。

そう、ここは確かに日本だ。しかし、ここにあまりにも日本離れた街があった。

——『ミッドガルド』。

通称、『城壁』。町全体を円状に覆う白い壁から、その呼び名がついた。

通称といっても、この街の存在を知っている者は非常に希少だ。なにせ、日本の地図にはこの街は記されてないし、政府ですら、この

街の存在を知らない。

日本中どこを探しても、『ミッドガルド』を見つけることはできないだろう。

——普通の人ならば。

そう、それはあくまで、『普通の人』だった場合だ。

話は戻って——

服を着替えた銀髪は、路地を歩いていた。朝の冷気が肌を刺す。

『ミッドガルド』。

この街の名だ。

そしてこの少年の名は、

ツバサ
『Tubasa・W・Radiant』
・ホワイ特・レディアント

この街に、国籍は関係ないようだ。

彼の名前、ツバサ、の由来は、教えるまでもあるまい。

2..ああ、何故私は飛べないのですか（後書き）

今中学生で、勉強などでなかなか更新できない上、まだ始まったばかりですが今後ともよろしくお願いします！

第一章・その1・始まりとはいつも唐突なものだ。

君は『世界』というものを、どう思うだろう？

これについてはいろいろな考えを持つている人がいることだろう。

苦しいこともあるだろうし、楽しいこともあるだろう。『不幸』も

『幸福』も、世界が織り成す『物語』のひとつ。

『苦しくて苦しくてどうしようもない』とき、君は何を思うだろう。

『苦しくて苦しくてどうしようもない』とき、君が一番に思い浮かぶ人――。

それが、君の大切な人だ。

親でも、友達でも、仲間でも。

翼を持つ俺は、どうなんだろう――。

今、俺には大切な人などいない。

かつて、ありとあらゆる人々にさげすまれ、すべてを恨んだ。呪った。『世界』など、いららないと思った。

ひとつだけ。

たった一つだけ、俺にも大切な存在があった。

もう失ってしまったけれど。

捨てられて――しまったけれど。

大切だった。これ以上ないくらい。

それこそ――死ぬほど。

でも、そんなひとはもういない

そんな俺の物語第1章。

少年が街を歩いていた。

朝の冷気が立ち込める。薄く霧がかかり、あまりいい天気ではなかった。

彼の名は、ツバサといった。

ツバサは狭い路地を、ひたすら歩く。どこに向かっているのだろうか。それとも、ただあてもなくぶらぶらと歩いているのか。

答えは、前者のほうだった。

公園。少年はそこに行き着いた。ただ公園といっても遊具と呼べるようなものはなく、あるのは3つほどのベンチと、公園の中心部に位置する、斜めに傾いた1' 5 mほどの金属の棒だけだ。

その棒を囲む線が直径2 mほどの円になっていて、傾いた棒の先には1 2と書かれていた。

おそらくは、太陽時計になっていたのだろう。今は棒が傾いているので、時計としての機能は失われている。

ベンチは時計を囲むようにいちどられていた。それぞれ1 2, 4, 8が記されている場所に設置されてある。ツバサは4時の場所のベンチに座った。

ツバサはしばらくぼんやりと時計を眺めていた。

ふと、気づいた。

——誰かいる。

誰かがいること自体は不自然なことではなかった。この公園は公共のものであり、自分以外の誰かがいることは普通にあることだ。そう、そんなことはどうでもいい。

だが。

自分がベンチに座り、しばらくたってからそいつが自分の隣に座っていたことに気づいたことは、どうでもよくなかった。

この公園、入り口はひとつしかない。ツバサが公園に入ったときに公園にいたのは、ツバサただ一人だった。さらに、太陽時計の『4』に位置する場所は、入り口から対照的な場所だ。

つまり、『ツバサがぼんやりと時計を眺める』という行為は、『常に公園の入り口を眺める』という行為にもなる。なので誰かが公園に入ってきた場合、すぐさま気づくはずだ。

しかし、今の今まで気づかなかった。そいつが自分の隣に座るまで。そいつは少年だった。くろいふくをきていて、黒くて長い髪をしている。

黒い少年は言う。

「おはよう。お前は誰だい？」

「こちらのセリフだ。君は誰だ？」

フツと少年が笑みを見せた。

「佐藤翔平。」

「普通の名前だな。」

「嘘。ほんと佐藤優也。」

「それも嘘か？」

「ああ、本当の名は、E^{イーター}ater。」

「イーターか……。さっきまでの名前とは一変して、変わった名前だ。イーター……。意味は『喰う者』。」

ツバサは言う。

「ぶっそんな名前だな。何で『喰う者』、なんだ？」

「僕だからさ。そういうお前は？」

「俺は」

「ああ、名乗らなくてもいいぞ。知ってるから。」

「知ってる？俺の名前を？」

「ああ。『ツバサ』だろ。名前の由来は、『翼が生えているから』。
……違うか？」

「……！」

なんで初対面のやつが俺のことをそこまで知っているんだ？

ツバサは少しだが不安になってきた。こいつは何者だ？

「イーターは、微笑む。」

「そんなに警戒しなくてもいいぞ。」

「そうもいくか。」

「いやいや、僕はお前の味方だから大丈夫だ。」

「信用できんな。そもそも、君は何者なんだ？」

「だから、イー」

「名前じゃない！」

こいつ・・・少しずれてないか？

ツバサはため息を吐きつつ思った。そもそも、こいつはどうやってツバサに気づかれずに彼の隣に座れたのだろうか？――こいつの存在は謎だ。ツバサは心の底からそう思った。

「なあ、イーター。」

「何だ、ツバサ？どんな質問でも答えてやるぜ？どうやってお前に気づかれずにお前の隣に座れたのか、とか。」

「・・・俺が聞きたかったことを先に言うな。」

「ああ、これで良いのか？えーっとな、最初からいたんだ。公園に。」

「は？」

彼は、ありえないことをさらりと言って見せた。最初からいただと？ツバサは言う。

「馬鹿なことを言うんじゃない。俺がここに来た時にはお前の姿は見えなかった。というか、どこにも居なかったじゃないか。」

「僕を見てなかっただけだろう。」

「いや、俺は公園全体を見渡したぞ。」

「そういう意味じゃない。お前は僕を見ることが出来なかった。たったそれだけの話さ。」

見ることが、出来なかった・・・？

いったい、どういうことなんだ？

ツバサは、この上なく厄介なことに巻き込まれそうな気がした。

第一章・その1・始まりとはいつも唐突なものだ。(後書き)

次回、ものすごいことになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2509c/>

SILWING－白銀の翼－

2010年12月9日09時32分発行